

唯一無味

2年

スタンドライトが飲みかけのサイダーを照らす。もう炭酸が抜け始めているただの甘い水は、一日中歩き回った身体にじんわりと溶けていくようだった。口の中にサイダー独特の甘ったるさが纏わりついてきて余計疲れる。少しだけ残っている炭酸を舌尖で感じながら前髪を直す。

「準備いい？いくよー」

冷め切った目でそう言って、私の返事を待つことなく人差し指をスマホから離した。もし、まだ準備段階でも編集でどうにかなる。私は準備が整ったのを咳払いで伝え、撮影が始まった。

「みなさんこんにちは！マリモモチャンネルの麻里と！」

「桃ですー」

さっきの冷たさから一変、麻里は画面に向かって不思議なくらいの笑顔を見せる。私もそれに負けじと笑顔を作り、息を吸う。

「今日は、服屋さん巡りをしてきたので、夏にぴったりなコーデをいくつか紹介したいと思いますー！」

時折手を顔の前で合わせるのは視聴者が見ている飽きないための工夫だ。

動画サイトへヒラオチャレンジ略して、へびチャレは主に私たちのような学生が動画をあげるためのサイトだ。投稿できる年齢は十二歳から十八歳までで、一か月のうちに出した全ての動画の視聴者数によって月にランキングが決まる。そのランキングで上位に入るとその分の報酬がある。一位は二万円、二位は九千円、というように三十位までいくらかの報酬が貰える。それは大手通販サイトのみで使えるお金へと変わる。そのため学生は、お小遣いを稼ぐ感覚で利用していて近年の流行になっている。

「よし、今日の撮影終わりー」

はあーあ、と欠伸のようなため息を吐いて麻里はスマホをじっと見つめる。そして、忙しい指を画面の上で動かしている。いつもこうだ。いつも麻里は撮影で使ったものを片付けない。動画の編集も私が七割やっている。

足元に散らばった衣服たちが萎れている。『プチプラはみんなにウケるから』という理由だけで買ったノースリーブのティシャツは脱ぎ捨てられたことで、買った値段よりもずっと安く見えてしまう。本当は今すぐにも麻里に注意したいけど、このチャンネルが成り立っているのは麻里のおかげだ。私は麻里に比べて顔は可愛くないし、スタイルは悪い。それは視聴者からのコメントからもよく分かる。引き立て役。きつと私はその部類なのだろう。それでも私は中学で初めてできた友達を大切にしたいと思っている。だけど、もしかしたら向こうは本当の友達を求めているわけじゃないのかもしれない。

「ねえ、桃？ 今日のランキング五位じゃん。麻里、もう報酬で買う物決めたんだ」

私と目すら合わさずにそう言った。そんな麻里の顔は、スマホから溢れるブルーライトに照らされていた。